

藤田浩子の 少し昔のこと 〈89〉

赤ちゃんの指定席

ジイちゃんやバアちゃんと一緒に住んでいる家庭なら、お母さんが忙しいとき、赤ちゃんや幼い子は、たいていジジババの膝に座っていました。ジジババがいなければ、昼間はお母さんの膝で、夜はお父さんの膝に座っていました。とにかくベビーラックという赤ちゃん用の椅子が家庭で使われるようになるまでは、だれかの膝が赤ちゃんの指定席でした。

道路がコンクリートやアスファルトになる前、でこぼこの砂利道のころ、赤ちゃんの移動手段は誰かの背中でした。

私が福島で子育てしたころも、大通りだけは舗装されていましたが、大通りにでるまでの道はでこぼこの砂利道でしたから、とてもベビーカー（当時は乳母車といいましたが）は使えません。

乳母車を使っていたのは都会の人だけだったと思います。だいたいの母親は出かけるとき赤ちゃん



を負んぶするのが当たり前でした。

抱っこにせよ、負んぶにせよ、赤ちゃんは常に「人間」にくっついていたので。

いま、赤ちゃんはテレビの前で、ベビーラックに座らされています。出かけるときはベビーカー、クルマに乗るときはベビーカー（赤ちゃんの安全のためです）、自転車に乗せられるようになって、運転者の前か後ろの椅子に「1人で」座られます。

猿は一定期間（親が次の発情期になるまで？）常に背中に乗せるか、おなかにくっつけるか、とにかくべったりくっつけて育てます。人間も哺乳類の1種ですから、もともとはべったりくっつけて育てていたのでしょう。それがベビーカーやおむつやらビデオやら、便利な子育て用品の発明にともない、べったりくっつける時間が少なくなりました。たとえ親や保育士に見守られているにしても、「一人で」ラックに座り「1人で」おむつにオシッコをし「1人で」ビデオを見ながら眠り…、「べったり」の時間が減りました。

リレー連載 <221>

わたしの大好きな絵本

かみちゃん

みんなの大好きな、そして誰からも慕われているアナグマが年をとって長いトンネルの向こうに旅立ってしまうという、少し悲しいお話ですが、読み終えたあとは何故か心が温かくなれる絵本です。

アナグマは自分がいなくなった後の森の仲間たちのことを心配していました。

仲間たちは、いつも一緒にいてくれたアナグマとの思い出を心の中に持ち続けて深い悲しみの日々を過ごしますが、春が来てみんなが集まり、アナグマとの思い出を語り合うと、悲しい気持ちも

『わすれられないおくりもの』

スーザン・パーレイ 作 絵

小川 仁央 訳

評論社

晴れて、それぞれの思い出がみんなの宝ものになり、アナグマの話が出るたびに誰かが楽しい思い出を話すことができるようになるのです。

私自身、色々なタイミングでこの絵本を思い浮かべることが何度かありました。その度に「体はきえても心は残る」という言葉を思い出し、元気づけられ、心の支えになっていたわすれられない一冊です。

